

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話: 044-988-0004(柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第71号

古代・中世の古道を探す ～東海道・中原街道を地名から覗く～

川崎を通過する主要な道路と考えられる東海道や中原街道は、江戸時代やそれ以前は果たしてどんなルートで通っていたのでしょうか。

東海道は古代から存在しましたが、今日の東海道とはルートも少し異なります。鎌倉時代になりますと、京都と鎌倉を結ぶルートとして軍事的に重要な街道でした。江戸時代になりますと、人々の活動も活発化し、参勤交代等、



政治的な交通路としての意味を強く持つようになります。一方、江戸への経済的な物流の街道としては、むしろ中原街道がその役割を負うようになったようです。

したがって江戸時代は交通網が盛んに整備され、江戸に近い川崎周辺

の東海道や中原街道添いの町なども宿場や物資の中継地点として大いに賑わったことでしょう。そのためか、川崎市内の東海道や中原街道は、地方道路とは異なり直線的に整備がされた道路が比較的多いことがわかります。現実には中原街道などは上の地図のように丸子の渡しから千年辺りまでは近代以前の道路としては直線的な道がたくさん見られます。また東海道でも八丁啜(はっちょうなわて)通りのように、直線的な道路も見られます。これらの街道は大方江戸時代に整備されたものです。したがって、これらの整備された街道の周辺には、きっと近世以前の古代～中世の名残が隠されている“古道”がどこかにひっそりと眠っている可能性があると考えられます。

今回はそのあたりを地名の視点で考えて見ましょう。例えば、江戸時代編纂の新編武蔵風土記稿「岩川村」の項には、中原街道の千年交差点手前(現高津区千年付近)、野川方面に向かって左側の地域は、小名(現在の「宇」あざ)に“新道端(しんみちばた・しんどうばた)”という地名が見られます。これは旧道に対して、“新道”、すなわち江戸時代に新しく整備された道の横にある地名という意味だと思います。ということは、この新道の近くには江戸時代以前の“古道”があったはずで、旧中原街道添いには、同じような地名の付いた場所がいくつか見られます。例えば大和市上和田の中原街道添いには“新道(しんみち・しんどう)” “新道添(しんみちぞえ・しんどうぞえ)”という地名が現在でも残されています。

さて、保土ヶ谷宿は慶長6年(1601)神奈川宿とともに開かれた宿場で、東海道の中では早く出来上がった宿場でした。現在、JR 保土ヶ谷駅を挟んで国道1号線(現東海道)と対面には直線に伸びる旧東海道保土ヶ谷宿の町並みが見られます。その旧道(旧東海道＝下図の実線)の西方向に、やや並行に曲がりくねりながら、旧道以前の“古道(古東海道＝下図の破線)”の姿が見えます。地名も旧道と古道の分岐点にある“追分”から旧道には“新町通(しんまちどおり)”、一方、古道には“古町通” “古町橋(ふるまちばし)”という地名が残されています。

このようにして見てみると、古い街道も、地名という視点だけで見ても多くの歴史的発見につながることがわかります。次回は中原街道の古道についてもう少し考えて見ます。



平成10年の地図から見る東海道 保土ヶ谷宿周辺の道

(文:板倉)

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第41話

麻生の古道(2) 義貞伝承道

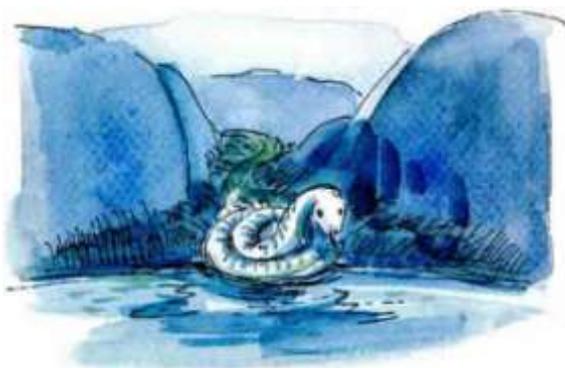
小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

元弘3(1333)年上野国で挙兵した新田義貞の鎌倉攻めは軍勢十万騎といわれ、分倍河原(府中)で幕府軍を破り、軍を鎌倉街道“上ノ道”に進めますが、各地に義貞に味方する武士が蜂起。鎌倉防衛の前線だった多摩丘陵は、街道はおろか村の里道まで軍馬が押し寄せ、麻生の地は戦乱の渦に巻き込まれてしまいます。

この地の鎌倉攻めの道筋は麻生地内全域に及んでいます。現東柿生小学校の地にあった王禅寺(または薬師寺、本稿第12話参照)が焼き払われたという伝承はこの折の戦いで、多摩川を関戸、是政で渡河した義貞軍は稲城から金程、王禅寺へと進攻したと予想されます。その際義貞軍は現真福寺白山神社あたりで幕府軍の抵抗にあっています。それは、この地に戦死した人を葬ったとされる“はかな谷(はかの谷)”の伝承があり、それを裏付けるように貞治2(1363)年銘の板碑が発見されていることから、地元武士との戦いであったかとも考えられます。その道筋は現三井団地の子供文化センター、稲荷森稲荷の急坂を降りますが、この坂を“峰坂”と呼び、今も古道の跡を幽かに残しています。



白山神社(はかな谷伝承地)

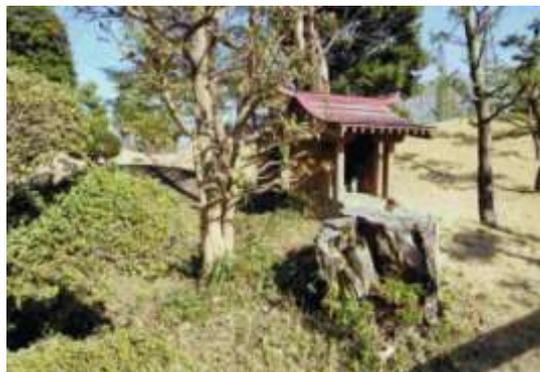


籠口の池(佐藤英行画)

この現東柿生小学校からの道筋は鶴見川を渡り、寺家、恩田、青砥と前稿尊氏道と並行、鎌倉街道中ノ道に至りますが、鶴見川を越えた寺家に周囲一丈八尺、推定樹齢600年の小金松と呼ぶ大松がありました。この地は現在横浜・町田・川崎市の接点で古い歴史を持ち、フランス式地図には稜線に太い道筋と思われるものが示されています。惜しいことにこの松は昭和22年に枯死しましたが、“鎌倉街道見透かしの松”ともいい、前稿早野の鉄火松・並木松と一連の松だったと思われます。

王禅寺が焼かれ、白山の戦いのその折、この峰坂に隣接する

“籠口の池”から白龍が現れ、軍勢を呪ったとする伝承があります。もともとこの地は鎌倉に近く、北条恩顧の武士農民が多く、国の体制(建武中興)がどうであれ、他国の軍勢が村の暮らしを脅かすのには、大きな憤りがあったのでしょう。



小金松跡(青葉区寺家・左)と小金松碑



この義貞の鎌倉攻め道は、早野で鶴見川本流に添う“かながわみち”に接します。この“かながわみち”は神奈川～八王子を結び、鎌倉街道が南北(縦線)の道であるのに対し、東西(横線)に走る幹道でした。神奈川で鎌倉街道下ノ道、荏田・市ヶ尾で中ノ道、そして早野で尊氏・義貞道、岡上で早ノ道、町田の野津田で上ノ道に交差する鎌倉街道の連絡道です。鶴見川本支流には有力な鎌倉御家人の多かったことから幕府の主要道でもあり、義貞の鎌倉攻めには、とりわけこの道には軍馬の往来が激しかったのではないのでしょうか。

時は移り、北条幕府は亡び、御家人は力を失い、“かながわみち”は応永23(1416)年鎌倉公方、関東管領の争いから再び軍道化が始まります。そして北条早雲(後北条)の関東進出(1491年)時には、小机、茅ヶ崎、荏田、亀井、小沢(三輪)等の城を増改築。この道は北関東から小田原を守る前線にその役割を変え、これらの城の存在は鎌倉期に勝る争乱をこの地に与えています。

そして徳川幕府が成立(1603年)して江戸時代、この道は日野往還(現横浜上麻生線)と呼び、鶴見川流域の村々(明治12年で久良木郡44ヶ村、都筑郡69ヶ村、南多摩郡121ヶ村)の横浜～八王子を結ぶ産業道路となり、後年麻生、能ヶ谷で津久井道(現世田谷町田線)と合流、町田市の野津田、多摩市の柚木を経て八王子へのシルクロードとなっていきました。

参考資料:「地図で辿る思い出のふるさと(柿生岡上の百年会)」
「歩け歩こう麻生の里(麻生老人クラブ)」「川崎市史」「横浜市史」

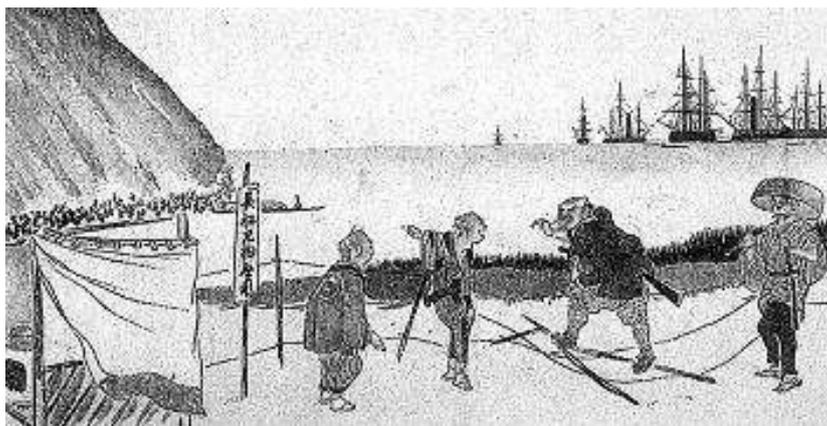
シリーズ 黒船来航

開国秘話 (7)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆ペリー艦隊の再訪◆

1853年7月17日に日本を去ったペリー一行は、7ヵ月後の翌年2月、厳冬期の日本にやってきました。今回は総勢 11 艘の大部隊でした。艦隊のうち1艘は、相模沖で座礁しました。厳冬期です。厳しい寒さの中、近在の日本人漁民が自発的に救助に駆けつけました。外国船にも、薪や水を提供するのは差し支えなしとする、天保薪水令が知れ渡っていたことから、救助には何のためらいもなく、漁民たちの義侠心が厳寒の海での救助活動に繋がったのです。異国船であっても、海難救助は船乗りの仁義でした。この行動にペリー一行が大きな感銘を受けたことが、艦隊の記録に残されています。



「黒船見物無用」の立て札を無視して、黒船見物にやってきた見物人
(『黒船来航図鑑』より)

座礁した1艘を除く、10艘の艦隊が江戸湾に揃ったのは、1854年2月13日(嘉永7年1月16日)でした。三浦半島の観音崎と房総半島の富津を結ぶ海防線を突破し、艦隊は横浜沖に停泊し、その地をアメリカ停泊地と命名しました。大量の小舟が艦隊の周囲に群がりました。中には漁船もありましたが、黒船見たさにやってきた野次馬を乗せ、しっかり料金をせしめるちゃっかり舟が、ほとんどでした。大勢の見物客がやってきたのです。

こうした物見遊山が可能だったのですから、当時の日本経済が、貧しさで首も回らない状態とは、縁がなかったことは確かです。舟に乗る金はなくても、浜辺でも黒船見物は出来ます。こうした野次馬はさらに多く、浜辺は毎日大変な賑わいだったことが、当時の瓦版などから読み取れます。見物客の中に、禅寺丸柿の販売で潤った柿生村周辺の好奇心の強い人々が混じっていたに違いないと私は睨んでいます。今後の調査による記録の発見に期待したいところです。

◆ペリー艦隊は何故厳寒期にやってきたのか◆

東シナ海も日本近海も厳冬期は大きく荒れるため、航海には不向きな季節であることは、船乗りなら誰でも知っています。それなのに何故、ペリーは春に再訪するとした予定を繰り上げてやってきたのでしょうか。そのわけは、ペリーがいくつもの難問を抱えていたからです。

第1に、ペリーが徳川将軍家に差し出した国書は、共和党のフィルモア大統領のものでした。ペリー自身を東インド艦隊司令長官に任命したのもフィルモアでした。しかし、ペリーがアメリカ西海岸を出航した後の1852年11月の大統領選挙で、フィルモアは民主党のピアース候補に敗れ、53年の3月には大統領が交代していたのです。つまり、徳川将軍家が受け取った国書は、正確には前大統領の国書だったのです。そして何よりピアースの対外政策は、フィルモア時代よりずっと内向きでした。

第2に、ペリーが中国に長く滞在することになった事にも関係するのですが、国務省の中華弁務官(今で言う中国総領事でしょうか)と海軍省のペリーの間で、中国重視か日本重視か、見解が分かれていたのです。

そして第3に、これがペリーを慌てさせた最大の要因なのですが、ロシアがプチャーチン使節団を日本に送ったことが挙げられます。プチャーチンはペリーに1歩遅れましたが、53年夏に長崎に来航しました。ここに米露間の対日一番乗り競争が激化したのです。上海の各国使節の間では、プチャーチンが先を越すらしいという、まことしやかな噂まで飛び交い、ペリーも心穏やかではなかったのです。

実際には、ロシアはそれほど一番乗りには拘っていませんでした。ロシアは日本への寄港と交易さえ認められれば良いという態度でした。当時の国際法には、「最恵国待遇」という規定がありました。最初に条約を結んだ国と同等の権益を、後発の国も得ることが出来る決まりです。そのため、大国ほど鷹揚に構えていて、後から登場しては、美味しい分け前に預かることも、珍しいことではなかったのです。

ですから、ロシアは勿論、植民地先進国のイギリスやフランスも、アメリカの行動に対して様子見を決め込んでいたのです。それでもペリーは急ぎました。何故ペリーは、一番乗りには拘ったのでしょうか。それは、当時の国際法における最恵国待遇の規定では、最初に結ばれた条約が全てを決する力を持っていたからです。後続の国々も最初の条約と同等の権益を獲得することはできたのですが、それ以上の権益は獲得出来ない決まりになっていたのです。その意味で、ペリーは一番乗りには拘ったのです。



プチャーチン提督

(続)

第45回カルチャーセミナーを終えて

東柿生小学校内遺跡の実態が少しずつ判ってきた

2月22日(土)、市民ミュージアムの新井悟氏にお越しいただき、麻生の古代・中世の姿を探るべく、『東柿生小学校遺跡発掘調査結果から分かること』と題して講演を行っていただきました。



左から「高坏」「甕」「埴」

この「東柿生小学校内遺跡」は縄文時代から中世・近世に至るまでの複合遺跡と考えられ、半径1Km 内には王禅寺白山横穴墓群・麻生台横穴墓群を始めとする約12以上の横穴墓群や古墳群が散在しています。

特に新井講師には東柿生小学校に所蔵されている昭和40年に発掘(現在の東柿生小学校正門付近)された古墳時代の高坏(たかつき)・甕(かめ)・埴(かん)などの実物を使いながら講義していただきました。

新井氏はこれらの土器類で、甕などに炭化物の付着がなく、火にかけた形跡がないことや、土器類の摩耗が少ないこと、高坏などに朱の顔料

が塗られていることなどから生活感が少なく、寧ろこれらの土器類は祭祀(さいし)などの宗教的行事に使用された可能性が高いとの見解を出されていっしやいました。

また、周辺の横穴墓群に描かれている線刻画の人面などは、7世紀頃のものと思われるが、祖先神を表しているのではないかと考えられ、これまでの自然神から祖先神への変化は日本の原始信仰形態の歴史的変遷を示す貴重な資料となりうるものではないかと述べられていっしやいました。

東柿生小学校所蔵の高坏などの土師器(はじき=古墳時代に作られた約850℃程で焼いた素焼の土器)が、柿生周辺にある横穴墓群と同時代の7世紀のものであるとするならば、鶴見川水系早淵川流域の荏田古墳群(赤田古墳)や柚ノ木古墳(横浜市都筑区)周辺の遺跡、鶴見川流域の市ヶ尾古墳群(殿谷古墳)、そして麻生区上麻生の日光台遺跡とのつながりも出てきそうです。今後これらの地域の出土品との比較や鶴見川水系横穴墓の関連性も調べていくと興味ある結果が出てくるのではないかと考えられます。



講師の新井悟氏

(文:板倉)

柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日:偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日

4月 5・12・19・26日(毎土曜日)

5月 4・11・18・25日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時

柿生郷土史料館3～4月の催物ご案内(入場無料)

第7回 実物のミニ歴史資料展

明治6年 太陽暦に替わった日

展示品:「明治5年 太陰暦」「明治6年 太陽暦」「江戸期 伊勢暦」「改暦辨(福沢諭吉著)」他

期間:4月26日(土)～6月28日(土)
(開館日:4月26日・5月⇒日曜日・6月⇒土曜日)

内容:明治6年太陽暦が採用されました。国内の混乱と改暦の意味を考えます。



明治5年の太陰暦(左)と同6年日本初の太陽暦啓蒙書

平成26年度 柿生郷土史料館「友の会」会員募集

当館の運営費用は「友の会」会費で賄われております。多くの皆様のご支援が必要です。なにとぞ、ご協力のほどよろしく願いいたします。(現在「友の会」会員は160個人・団体)

◆会員の種類 ・一般会員(年会費2000円) ・賛助会員(年会費3000円) ・法人会員(年会費1万円)

◆会員の期間 ・平成26年4月1日～平成27年3月31日(1年間)

◆申込方法 ①セラサ川崎農協東柿生支店に振り込んでいただく

・現会員の方:ご自宅、団体に振込先記入済みの振り込み用紙を郵送します

・新規にお申し込みの方:振り込み用紙に下記の振込先をご記入の上お振り込みください

(金融機関)セラサ川崎農協 東柿生支店 (振込先)柿生史料館代表 久保倉良三 (口座番号)普通 0013802

②直接史料館へ開館日にご持参いただく(会費、氏名・住所・電話番号、会員の種類を同封ください)

③お近くの史料館支援委員に直接お渡しいただく(内容は同上)

◆その他 ・会員期間は年度単位ですが、随時受け付けさせていただいております。